

Title	帝政期を中心とした極東ロシア・ウラジオストクの衛生問題
Author(s)	藤本, 尊正
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/59128">https://hdl.handle.net/11094/59128</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a>〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 【18】

氏名	藤本尊正
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第25057号
学位授与年月日	平成24年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学位論文名	帝政期を中心とした極東ロシア・ウラジオストクの衛生問題
論文審査委員	(主査) 教授 生田美智子 (副査) 大阪経済法科大学教授 藤本和貴夫 教授 藤目 ゆき 准教授 進藤 修一 准教授 藤原 克美

## 論文内容の要旨

## 本論の研究課題について

本論の課題はロシア帝政期のうちの、19世紀後半から20世紀の初めにおける、極東ロシア地域、ウラジオストク市の衛生対策とアジア系居留民に与えるその影響の考察である。アジア系居留民とは清国人、朝鮮人、日本人からなる東北アジア地域からの移民である。該当する時期のウラジオストクは移民の町であり、その住民構成はロシア人移民と東北アジア3か国出自の移民からなっていた。アジア系居留民の居住空間として、ウラジオストクにはキタイスカ・コレイカヤ・スロボトカが設けられたが、その発生と形成過程については今まであまり考察されてこなかった。ウラジオストク市の衛生対策として清国人と朝鮮人移民を隔離するために設けられた程度しか言及されてこなかったのだった。本論

の考察対象として、キタイスカ・コレイカヤ・スロボトカを主に取り上げて、その発生要因、形成課程、形成以降の変遷を見ていくことで、ウラジオストク市政府の衛生対策がアジア系居留民に与えた居住空間の影響について詳細に分析を試みたい。キタイスカ・コレイカヤ・スロボトカというアジア系居留民の居住空間を考察対象として取り上げることで、ウラジオストクの都市史の研究における空間部分を埋めることを本論の目的とした。

ウラジオストクの都市史において、キタイスカ・コレイカヤ・スロボトカについては市から不衛生な清国人や朝鮮人たちを隔離するために1893年に形成されて、1911年にさらに遠方に移転された居住空間であるという程度しか今までに触れられてこなかった。マトヴェーエフや原暉之の一連の研究においても、いつ形成されて、いつ移転したのかという事象の時期の問題ぐらいしか触れられていなかった。あるいは、反日運動の極東ロシアの拠点として、日本軍との諍いなどの舞台であるという側面から主に朝鮮人の出入り、諜報活動の事実などが考察されてきた。よって、衛生問題という居住空間の形成、変遷に関する考察というものは置き去りにされてきた。それよりもシベリア出兵期における日本軍と朝鮮人との接触についての考察に関心が傾向していた。今までの研究ではキタイスカ・コレイカヤ・スロボトカに関する考察は朝鮮人民族の極東ロシアにおける移民史の中で行われていた。

本論では市に不衛生な影響を与えるアジア系居留民の隔離空間という事実の言及に留まっていた、キタイスカ・コレイカヤ・スロボトカという居住空間自体の問題について検討することで、ウラジオストクの都市史の研究における空間部分を明らかにしていきたい。どのような権力組織によって、どのような都市衛生問題の事象が理由となって隔離されたのかという考察がこれまでの研究では見られなかった。その要因としてはウラジオストクに関する研究が居住移民のうちの一族の団体、それらの発展に関するものに集中していた点が挙げられる。その焦点になったのは各民族の経済発展だった。つまり、商店の集う中心街という居住空間の考察に集中していたのだった。キタイスカ・コレイカヤ・スロボトカという居住空間と衛生問題の関係を通して、ウラジオストク市政府がアジア系居留民にどのような居住空間への影響を与えたのかということが、どのような組織が、どのような要因によって隔離したのかという問いに答えるための大局的な視点となるだろう。

本論をウラジオストクの都市史の一端と位置付けたことについて触れると、その理由はキタイスカ・コレイカヤ・スロボトカを中心にして市の衛生対策、衛生問題を考察する場合に、その形成、変遷に関する問題が及ぶ空間は、単純に市の外側の該当部分だけではなく、当時のウラジオストクの全体的な空間に及ぶからである。つまり、その居住空間の形成、変遷は全市的な市街形成の構造と密接に関連しており、ウラジオストク全体の衛生対策、衛生問題が影響する居住空間にほぼ一致するからである。言い換えれば、キタイスカ・コレイカヤ・スロボトカとはウラジオストクの衛生対策そのものであり、衛生問題

の多くを解決したかどうかは別として、行政的にそれらの問題案件を集中的に投げ込んだ居住空間なのであった。

また、他方で世界史の側面から見れば、19世紀を中心とした近代における、パンデミック研究の地理的空間を埋めるという研究要素も併せ持っている。見市雅俊はインドから世界各地へ拡大したコレラについて、宗主国であったイギリスについて見ているし、飯島渉は中国の疫病流入とその対策について考察している。東北アジア地域に目を移すと、スポットニツキーはハルビンにおける1910年のペスト流行について発生過程と隔離処方を軸とした対策について考察している。近代におけるパンデミックとその流入、拡大過程と流入先での対策について見た場合に、当時の航路ネットワークや移民の流れから、ほぼ疫病の流入先の最終地点と考えることもできるウラジオストクや極東ロシアについての研究が未だ見られないことで、疫病や衛生対策の近代史における地理的空間が残ったままなのだった。よって、ウラジオストクの一都市史としての衛生問題は、世界史の側面から見た場合に近代の疫病や公衆衛生に関する歴史研究の地理的空間を埋めるものになると考えられる。

#### 本論の構成について

ウラジオストクの都市史における衛生問題を見るために、キタイスカ・コレイスカヤ・スロボトカという居住空間を中心的な分析対象として、ウラジオストク市政府の衛生対策とアジア系居留民の居住空間に対する影響を見ることが本論の目的であるが、そのために本論の構造をキタイスカ・コレイスカヤ・スロボトカの形成過程、発生、変遷、移転といった時期によって4章に分けて、考察と分析を試みたい。

まず、第1章ではその形成過程の前段階に焦点を当てて、ウラジオストクに不衛生な都市環境が形成される過程を分析したい。第2章では前章で見た不衛生な都市環境の形成によって、ウラジオストクに流入し、猛威を振るった疫病の対策と課題について考察したい。そして、キタイスカ・コレイスカヤ・スロボトカの形成過程における実行段階から発生、発生以後にそれがウラジオストクの居住空間に与えた影響について分析したい。以上の2章分が時期的に19世紀後半に該当するのに対して、第3章、4章では20世紀の初めからシベリア出兵期までの時期について考察を試みる。第3章ではキタイスカ・コレイスカヤ・スロボトカの変遷過程において、疫病の流入やウラジオストク市内の衛生問題と変遷過程の関係について考察する。つまり、どのようなウラジオストクの衛生問題があって、キタイスカ・コレイスカヤ・スロボトカの変遷、移転が起こったのかということ进行分析したい。最後に第4章ではキタイスカ・コレイスカヤ・スロボトカの移転後の疫病の流入と、ウラジオストクの都市環境について考察したい。よって、キタイスカ・コレイスカヤ・スロボトカという市政府の隔離政策が市の衛生環境にどのような影響を与えたのかということを見たい。

19世紀後半からシベリア出兵期までのロシア帝政期を中心とした時期を考察対象として

選んだのは、その時期のウラジオストクがさまざまな移民の集住した時期であったし、異文化交流の都市としての側面をウラジオストクが最大限に帯びた時期であったからだ。疫病の流入というものは無意識的に流入者が持ち込むものであり、そこに何らかの意図はない。マクニールが考察しているように疫病と世界史の発展というものは、移民の流れと衝突、都市の発生と形成過程に大きく結びついているものなのである。そのような観点から移民の流入が集中した時期の衛生問題を考察することは、ウラジオストクという都市の都市形成過程において重要な要素を考察することに他ならない。

#### 研究成果について

マクニールが考察したように疫病の蔓延が移民の流れと都市の発展に大きく関連していることから見ると、都市の居住空間というものの構造には、異なる居住民グループの接触、摩擦、妥協といったものの表象が間接的に表れるものだと考えられる。疫病が流入して、都市の不衛生な環境が形成される経過には、外から流入するものや新しく設けられる都市機能や設備と、元の居住空間に属する物との間の折衝が避けられないものである。ウラジオストク市政府の衛生対策とアジア系居留民の強制隔離の間には、キタイスカ・コレイスカヤ・スロボトカを通して現れる異文化間折衝の何らかの表象がある。

たとえば、1893年の清国人と朝鮮人の強制移住は結果的に清国人の移住が失敗に終わり、市政府とウラジオストクの清国人社会との間の社会的離反という現象がウラジオストクの市街形成に現れることになった。また、セミョーノフの草刈り地やキタイスカ・コレイスカヤ・スロボトカといった居住空間が、ウラジオストクの都市環境を不衛生にしているといった要因として市政府に指摘されたことは、そこに住む住民の流入、生活といったものがウラジオストクの都市環境に害を及ぼすものであると市政府に認識されたことを表している。つまり、行政の対象として捕らえられ、居住空間を市街から分離されるといった、特定グループの移民の疎外といった表象となって、市街形成に表れるのだった。

ウラジオストク市政府の衛生対策がアジア系居留民に与えた居住空間への影響は、キタイスカ・コレイスカヤ・スロボトカという居住空間の発生、形成、変遷過程で都市構造における何らかの表象となってそれぞれの時期に現れて、それがウラジオストクの市街形成にも影響を及ぼすのだった。ウラジオストクの衛生問題によって表れた都市構造を見ることが、いくつかに分けられた居住空間の配置とそれらの住民の移動という座標を通して、ウラジオストクの雑多な移民で構成された都市社会の異文化折衝が明らかになるのである。

#### 論文審査の結果の要旨

「帝政期を中心とした極東ロシア・ウラジオストクの衛生問題」と題した本論文は、序章、結論を含め、六つの部分で構成され、その主な内容は以下のとおりである。

序章では、問題意識、研究の意義と課題、時代的枠組み、使用資料、方法論について説明を加えている。本論の課題はロシア帝政期を中心とする極東ロシア地域、ウラジオストク市の衛生対策とアジア系居留民に与えるその影響の考察である。ここでいうアジア系居留民とは中国人、朝鮮人、日本人からなる東北アジア地域からの移民を指す。中国からロシア領に編入されたウラジオストクは移民の町であり、その住民構成はロシア人移民と東北アジア3か国出身の移民からなっていた。疾病の根源をなすものとして、アジア系居留民、とくに朝鮮人と中国人の居住空間キタイスカ・コレイスカヤ・スロボトカが隔離地区に設けられたが、その成立・形成過程については今まであまり考察されてこなかった。先行研究としては、移民史や疫病史の蓄積があるが、移民史では衛生問題は視野にはいっておらず、疫病史でも極東ロシアのウラジオストクが取り上げられることはなかった。さらに、ウラジオストクはソ連時代、軍港都市として外国人に閉鎖されていたので、文書館へのアクセスそのものが不可能であった。この意味で文書館史料を駆使した本論文は、未開拓の空白部分に切り込んだ研究であるといえる。

考察対象として、アジア系居留民の隔離地であるキタイスカ・コレイスカヤ・スロボトカを主に取り上げたのは、ウラジオストク市の衛生対策の対象となったのがロシア人ではなく中国人や朝鮮人であったことによる。

第1章では、都市形成の前段階に焦点を当てて、ウラジオストクに不衛生な都市環境が形成される過程を分析している。海路ネットワークの拡大、アジア系移民の流入過程、スロボトカといわれる民族ごとの居留地の形成、アジア系居留民の組織化のプロセスが記述されている。

第2章では第1章で見た不衛生な都市環境に起因する疫病の対策について考察している。すなわち、下水や汚物処理などの不衛生な低賃金労働に従事していた中国人や朝鮮人を不衛生な存在とみなし隔離したキタイスカ・コレイスカヤ・スロボトカの発生とそれがウラジオストクの居住空間に与えた影響を分析している。

第3章では、キタイスカ・コレイスカヤ・スロボトカの変遷過程と、疫病の流入やウラ

ジオストク市の衛生対策の変遷過程の相関関係について考察している。

第4章ではキタイスカ・コレイスカヤ・スロボトカのノーヴァヤへの移転とウラジオストクの都市環境との関係を考察することで、キタイスカ・コレイスカヤ・スロボトカという市政府の隔離政策が市の衛生環境にどのような影響を与えたのかを考察している。

結論部分では、民族ごとの居住空間の発生と住民の移動という座標を通して、雑多な移民で構成されたウラジオストクの都市形成と異文化折衝の問題を明らかにしている。

本論文の特徴を述べると、その第一は、未刊行の文書館史料を用いた点にある。軍港であるウラジオストクは長らく閉鎖都市であったため、日本人研究者は、ロシア人研究者の用いた史料を利用するしかなかった。学位請求者が留学中に極東ロシア文書館において収集したウラジオストク市議会での衛生対策の議論など、未刊行の史料を駆使した点は高く評価される。

第二の特徴は、従来の研究が見逃していた定期刊行物を多く使用していることである。これは、学位請求者が北海道大学スラブ研究センター鈴木・中村奨学金研究生として北海道に滞在した際に収集した貴重な史料で、この点も、特筆される。

第三の特徴は、膨大な史料のなかから、韓人村と新韓村との関係を記述した史料を見つけたことである。従来、韓人村は新韓村に移転したと考えられてきた。しかし、同時期に両者が存在していることを物語る史料から、ウラジオストク当局の疾病隔離政策は結局、疾病を拡大するものであったことを裏付けた点は高く評価できる。

本論文は量的な大作であるだけでなく、内容的にも新しい発見が多く、ロシア史に多大の貢献をすることができたが、なお、残された課題もある。それらのうち、基本的なものに限って若干言及しておきたい。

第一は、膨大なデータの整理がつかない部分があり、明確性の弱い部分が見られることである。より適切な表現を用いることが今後の課題である。

第二は、独創的なテーマに踏み込んだ宿命でもあるが、先行研究に対する位置づけがやや弱い点である。どのような学問領域に貢献できたのか、あるいは学際的な研究なのかをよ

り明確にすべきである。

いくつかの残された課題はあるが、本論文の学術的価値を貶めるものではない。本論文が課題として設定したロシア帝政期のウラジオストク市の衛生対策とアジア系居留民に与えた影響の実態解明は十分に達成したといえる。未踏の分野に切り込んだ力作であり、学問的寄与も多大のものがあるといえよう。

これらのことを総合的に判断し、博士論文審査委員会は一致して、本論文が博士（言語文化学）の学位を与えるにふさわしい論文であるとの結論に達した。